

# 音楽を通じて 子ども達に機会を

世界は新型コロナウイルス感染拡大で、私たちの生活もそれまでとは大きく変わり我慢することが増えました。そんな中で感じるのは、人は心の豊かさがあるこそ、初めて人間らしく生きていられる。芸術や文化、スポーツは私たちの心に安らぎをもたらしてくれる大切なもの。ということ。こんな時代だからこそ「芸術と芸術ではない場所と一緒にいないといけない」と明確になったという田中さん。

才能がひしめき合うクラシック界で活躍する彼女にとって、音楽はどのような存在なのか、また音楽を通じてやりたいことを伺いました。



ソプラノ歌手  
田中彩子さん  
×  
舞鶴市長  
多々見良三

【場所】  
舞鶴市総合文化会館  
大ホール

**市長** 舞鶴出身で、これだけ世界で活躍されている方がいらつしゃるとは、知りませんでした。最初に聞きたいのは「JAPAN ASSOCIATION FOR MUSIC EDUCATION PROGRAM」という法人のこと。その主旨が、私が普段思っていることと全く同じなんです。田中さんが先頭になって設立されたのですか？

**田中さん(以下敬称略)** そうです。今後自分のキャリアのためだけに音楽を続けていくことにあまり興味が無いというか、執着心がなくて。でも音楽を続けていくときに、誰かの役に立つことができたらいいなと数年前から思っていました。そんな中、いろんな方に出会っていろんな国の状況を見て、未来を担う子ども達に何かできないかなと

考えていたところ、SDGsの活動を知りました。SDGs(※)の理念は皆ができること。皆が少しずつでもできるようなこと。じゃあ、音楽を通じて何かできないかと。南米のブエノスアイレスに「子ども達のオーケストラ」があります。そのオーケストラは貧富に関係なく、全員がオーディションを受けて、受かった子だけが入れます。どんな環境に生まれていようが、演奏している時は平等な世界。それってある意味本当に目指すべき姿だと。その子たちと日本の子も達を会わせたいなと思っただけです。子ども達にとって何かを「知る」ということは、大きな財産です。そういうきっかけを作ることができると環境を用意するのが大人の役割りなのかなと

思い、昨年、法人を設立して「SDGsと芸術」「SDGsと音楽」を柱に活動しています。

**市長** 舞鶴市はSDGs未来都市にも選ばれ、AIなどの先進技術を活用して、利便性を上げたり地域課題の解決につなげたりして「心が通う便利で豊かな田舎暮らし」の実現を目指しています。

私は、市内7中学の2年生の子ども達に夢や志を持つことの大切さを話しています。夢は自分のためですが、志は世のため人のためにどう尽くすかという事です。周りの大人たちの「君はこれが得意だから、こんなことをしたらどう？」というアドバイスがその子の将来の選択に極めて重要になると思っています。

すか？自分から習いたいと言ったんですか？

**田中** 幼稚園の敷地内に音楽教室があったので自然な流れで始めました。音楽一家とかでもないです。まず音楽は「楽しいもの」ということを植え付けてあげることがすごく大切だと思っていて、小さいことが後であるのはいいですけど、最初にあると「もついいや」となっちゃう。だから当時の先生には感謝しています。

**市長** ピアノの音を聞いたりして自分に合っているなというのがあったのでしょうか？

**田中** 習い事の中で、続いたのはピアノとエレキトーン。でも「ピアノが好きだったんですか？」と聞かれると、「ご飯を食べる、お風呂に入る、宿題をする」というルーティーンの一つだからやってきた感じです。でも好きだから続けられたんでしょうね。

**市長** プロになるのが難しいと感じた時は、どんな気持ちでしたか？

**田中** 17歳の時にこのまま続けるならプロになりたい。でも私の手が小さいこととかを考えると多分プロにはなれないだろうなと悟ったといいますが…。

**市長** それはピアノの先生から言われたとか？

**田中** 自分の中のもう一人の自分が「多分無理」と言ったんです。自分で自分を



田中彩子さんプロフィール

1984年生まれ。オーストリアのウィーン在住。ソプラノ歌手。西舞鶴高等学校を卒業後、18歳の時に単身でウィーンに渡り、ゼロから声楽家としての道を歩む。22歳という若さでソリストデビューを飾り、世界で活躍する。ソプラノの中でもさらに高い音域のコロラトゥーラは透き通るような歌声が特徴で「天使の声」と称され、その歌声を操る数少ない一人。2019年、Newsweek誌「世界が尊敬する日本人100人」に選出。

**田中** 自分のためだけにやっているより、誰かのためにやっているのとエネルギーがすごく出て結果的にそれが自分に返ってくる感覚をいつも感じています。

**市長** そういった生き方をしているのと周りは見ていてくれる。回りまわって何かあった時には仲間が助けてくれますね。

**ピアノの夢から声楽家の道へ**

**市長** 小さい時にピアノを指して頑張っていたら、ピアノは誰かに勧められてで

※SDGs(Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標)  
国連で決められた2030年までに達成すべき国際目標のこと。「貧困をなくす」「質の高い教育をみんなに」「生きがいも経済成長も」など、17の目標を掲げ、世界中の誰一人として取り残さないことを誓っています。



世界的にも少ない、珍しい声だと分かった。「珍しいんだったら、もうそれにします」と。ちょっとネガティブに聞こえるかもしれませんが、音楽をやりたいなら私にはそれしかないという感じで歌の方に行きました。いろいろな出会いや偶然が重なった…これも運命かもしれません。

新しい環境の歌の本場、ウィーンへ

信じられないということとは「道を変えないといけない」。そう思った時は、今までの17年間で全て否定されたような気になりました。

**市長** 音楽に方向転換するというきっかけは自分で決めたんですか？

**田中** そうです。一週間ちょっと。  
**市長** そこで、運命を変える人に会ったわけですか？

**田中** はい。その時にブルガリア人の宮廷歌手の方が私の声を聞いて「本気でプロになりたいんなら、今すぐ私のところに来なさい」と言ってくださって「じゃ行きます」と。今思えば、なかなか難な判断でしたね。

**市長** 親自身が心配で子どもを行かせる決断ができないし、子どもは親の近くにもう少しいたいと思うことが多い中で、単身18歳で外国に行くのはすごい決断ですね。

**田中** はい。その時にブルガリア人の宮廷歌手の方が私の声を聞いて「本気でプロになりたいんなら、今すぐ私のところに来なさい」と言ってくださって「じゃ行きます」と。今思えば、なかなか難な判断でしたね。  
**市長** 親自身が心配で子どもを行かせる決断ができないし、子どもは親の近くにもう少しいたいと思うことが多い中で、単身18歳で外国に行くのはすごい決断ですね。

**田中** 「ウィーンに留学しようと思つ」と両親に言ったら、どんな反応されるかと心配でしたが「そう、ほな行つたら」と(笑)。今でも感謝しています。行っている間も「そろそろ帰つてくれ」とか一度も言われなかったです。

**市長** 強い「両親ですね。田中さんは「うせやるならいきなり厳しいところに行つた方がいいと思う」とおっしゃっています。なぜですか？その考え方は誰かから教わったんですか？

**田中** 性格もあると思いますが、何かを達成したいと思つたら、やる努力は一緒じゃないですか？どうせ努力するんだつたら、どうせダメなら一番難しいところに行きたい、というのが私だけの、でも怖いからこつちにしておこうというのが、一番精神衛生上よくないと思うんです。気になるんだつたら行つて、ダメだったらそれですっきりしますよね。

**市長** はつきりされていますね。分かっていても実行するのは難しいことです。練習である程度うまくなつたとしても、素質と努力が

ないと世界に誇れるというレベルにまでは行けないと思います。振り返ってみて、一番努力したときはいつですか？  
**田中** いちばんつらい時期は最初の4年間です。両親からも4年だけはサポートするけど、その後は自分でなんとかしろと。同級生は大学生活を楽しんでいるのに、自分はウィーンに住んでいるという華やかに聞こえるかもしれないけど、本当に暗い毎日でした。3年目に「まだ何も残せていない、このまま帰つたら4年間が無駄になる」と思うと、精神的に追い詰められて高い声が出なくなつたんです。栄養失調で倒れてしまったこともありました。

**市長** それを乗り越えられた原動力は何ですか？

**田中** その時に1か月ほど全く音楽から離れた。それまでは音楽中心の生活で、遊びに誘われても「明日はレッスンだから」と断っていました。が「人生



を楽しまないといひ音楽家になれない」となぜか思つたんです。クラブで踊ったり、新しいことを始めたりしているうちにふと歌を口ずさんでいる自分がいた。「このまま私は歌から逃げて辞めていいのか」と自問したら、またもう一人の自分が「絶対いや」と言つたんです。もう一回やろうと決めて丁寧に練習をしたら、声も戻ってきました。その後初めて出た国際コンクールでスカウトされデビューが決まりました。4年は短いと言われますが、私としては30年くらいに感じました。

**市長** これだけ認められていてもまだ上を目指されているんですね。  
**田中** 今でもないです。今自分がこの場にいることがいつも奇跡だと思っています。

クラシックに触れるきっかけを作る

**市長** ここ数年は、取材やテレビで、クラシックやオペラの世界を多くの人に知ってもらおうと活動をされていますね。

**田中** クラシックは格調

が高くて…という方もありますが、個人的には高さを下げる必要は全くないと思っています。その場所を保ちつつどのよつにすれば皆さんに興味を持ってもらえるかを考えると、皆さんが見る番組で歌つというとても大事な事なかと。

これもSDGsの活動と関わっていて、コロナ禍

でコンサートがなくなり、音楽家たちは厳しい状況になりました。もともと音楽家という職業はあまり守られていないと感じていて、子ども達が「音楽家になつても将来食べていけないの」「稼げないんだつたら、ユーチューバーの方がいいよ」と思わないように、きちんと自分の足で立つていける職業として確立しないといけないのかな。最近の子ども達を見ていると現実主義的な子が多いですから(笑)。

**市長** すばらしいですね。私もさまざまな方面で活躍されている方と対談をして感じたのは、30、40代くらいから他の分野の有名な人と知り合つて、ジャンルが広がり、層も厚くなつていく。まさに田中さんも人のつながりが広がる段階で、どんどん階段を上つておられるように思います。

私は、芸術文化が得意な方はうらやましいなと思つているんです。才能がないので、そういう分野では活躍できないですが、元は医者ですから、腕を上げるために手術のうまい医者がいたら

全国どこにでも見に行つて、その人の技のエッセンスを「コピー」しました。

**田中** 私も、ヨーロッパに住みだした頃は外国の人の真似をしていたんです。が、真似は本物になれない。おっしゃるよつにエッセンスを見つけて、それだけは吸収するよつ努力しました。同じですね。

**市長** 田中さんのよつに世界で活躍する人がいることは、子ども達や舞鶴で生まれ育つた方がこのまちに誇り持つ1つの要因にもなります。この対談で自分の道は自分で切り開き、世のため人のために頑張ること、出会いやきっかけの大切さを市民の皆さんに伝えられたと思います。

**田中** こちらこそ、ありがとうございます。

